HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	森と地域の共生を通してSDGs な地域づくり
Author(s)	奈須, 憲一郎
Citation	科学技術コミュニケーション, 25, 89-93
Issue Date	2019-07
DOI	https://doi.org/10.14943/89919
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75051
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_nasu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

森と地域の共生を通してSDGsな地域づくり

奈須 憲一郎[1]

Building SDGs Communities through the Coexistence of Forests and Human Communities

NASU Kenichiro[1]

キーワード：下川町，SDGs，地域づくり

Keywords: Shimokawa town, SDGs, building communities

1. はじめに

下川町で議員をやっています，奈須憲一郎といいます．みなさん，どうぞよろしくお願いします．北大を出てちょうど20年になります．そのタイミングで，今日ここに立てることを大変奇遇というか光栄に思います．

北大を目指した理由は，高校生の頃に「オゾンホールに穴が開いた！　自分が何とかしなくちゃ！」と考えたのがきっかけです．その時はスペースシャトル的なものを打ち上げて，オゾン発生装置みたいなので工夫したら，オゾンホールは埋まるだろうという仮説を立てていました．それで，大学で勉強しようと思いまして，北海道は自然が豊かだし，「環境」と名の付く学部学科は当時ほとんどなかったのです．なので，北大の森林科学がおもしろそうということで目指しました．非常にざっくりとした課題設定と解決策というか，チャレンジですよね．

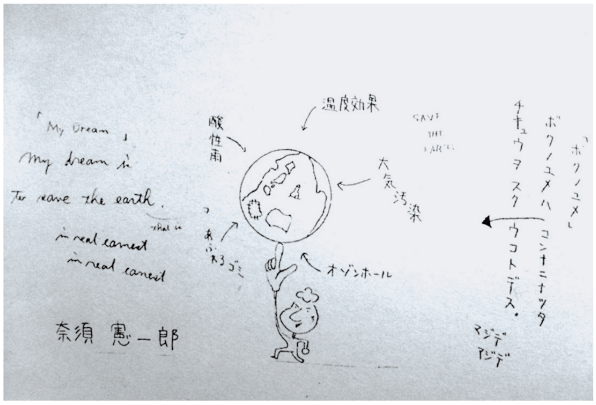


図1　高校の卒業文集に書いた「ボクノユメ」

恥ずかしいのですけれど，高校の卒業文集に「ボクノユメ」とかいって書いたのです．地球温暖化の言葉の意味もよく分からずに，「温度効果」や「SAVE THE EARTH」と書いてあったりして，青臭いですよね．「奈須，俺がやるんだぞ」みたいな勢いで書いていました．

北大に入って，いろいろと勉強しているうちに，科学技術でオゾンホールを塞いでも，また別の科学技術が違う問題を起こして，いたちごっこになっていることがわかりました．そして，その背景にはどうも資本主義という，人類が豊かに

2019年5月8日受付　2019年5月9日受理
所　属：1. NPO法人森の生活ファウンダー
連絡先：nasuken16@gmail.com

なるために開発したシステムが暴走しているのではないかと思うようになりました．それを民主主義できちんとコントロールしていけば，同じ問題が次々起こるのを防げるのではないかと考えました．そうこうしている間に，「地方自治は民主主義の学校である」という言葉を知り，今度は地方自治に目を向けました．だいたい，そういった強い思い込みで次々に行動へと移していきました．

2. 下川町役場へ

まずは持続可能な社会のコンパクトなモデルを地方自治で実現したいと考えました．だけれど，日本の農村は，過疎化でどんどん疲弊しています．北海道の市町村の全部の人口推計のデータを調べてみると，生まれる数より亡くなる数が多いし，転入してくるより転出者が多くて，どんどん減るばかりだとわかりました．高齢化が進んでいて，子どもがあまり生まれない以上，どうしても自然減になります．自然減は，もう止めようがありません．だったら，働き盛り年代の移住促進策が必要だと考えました．そういう人たちが移住してくると，単に人口が増えて，過疎化が少し穏やかになるだけではなくて，ローカルベンチャー的な発想も生まれます．地域の人たちは「うちの町には何もない」と思いがちなのですけれど，よそから来た人にとっては，何もないことそのものが資源に生まれ変わるといった具合に別の視点が出てきて，地域の魅力の再発見や自信につながります．「下川っていいな．また住み続けよう」と思える人が出てきて，よい循環になっていくのではないかということでやってみました．

国立社会保障・人口問題研究所の予想では，下川町は人口構成が上に偏って，下がすごく少なくなっていきます．だから，対策を打つ必要があります．ちょうど統一地方選の年なので，「こういう政策が必要だろう」と提案をしている最中です．大学生の時にも下川町に行ったし，大学院の修士課程の研究でも訪ねました．当時の下川町はすでに移住者が結構いたので，2ヵ月間滞在しながら，その人たちにインタビューをし，移住者が地域に来ることで何が起きるかを調べて，修士論文を書きました．論文のタイトルは『地域の内発的発展における「新住民」の果たす役割』です．ネットで検索すると出てくるので，興味があったら読んでみてください．

大学を出た後は，民主主義の学校である地方自治の現場，下川町役場に就職し，参与観察を行いました．これは社会科学的な言葉です．地域の住民としてではなく，少し研究者的な立場で，少し引いたポジションで物事を観察してみようというスタンスで地域に入りました．当時持っていた興味のひとつは，行政が批判される理由でした．新聞などを見たりしていると，行政は常に批判を受けています．自分が行政機関に入るにあたって，なぜそんなに批判されるのか，その理由を知りたいと思いました．批判される訳が分かれば，解決策が見つかるのではないかという問題意識を持って役場に入りました．

役場に入ると，結構，文書を作らなければいけないのですけれど，研究で身につけたスキルを活かせる場面が多く，例えばブラインドタッチができるとか，その程度でも当時はたいへん重宝されました．基本的な文書作成能力があること，そして情報リテラシー，ICT 活用，調査能力，論理的思考力，クリティカルシンキングといった，科学の分野で磨いてきたことがいざ社会に出てみると，実はずいぶんと役に立つことが分かりました．パソコンの使えない人がいたら「ちょっと教えてくれ」といわれて教えるうちに，「あいつ，ちょっと使えるな．助けてくれるな」といった形で人間関係を作ることができました．あと，私は社会学をベースに地域に入ってインタビューしてきたので，インタビューに入る前の社会調査の基礎的な手法について勉強をしていました．その中で，自己開示とラポールが大事だということを学びました．ラポールとはお互いが信頼し合い，打ち解けた雰囲気で何でも話せる空気を作ることです．社会調査で一番大事なことです．本音を聞きだせないと

調査の意味がありません．そこが勝負のしどころです．うわべだけの言葉では本質に迫れないのです．

ラポールの形成は自分は何者か，何を考えているのかを開示することからはじめます．その上で，「よく分かった．私は，こう考える」みたいなやりとりへと発展させていきます．ここで重要なのは押し付けではないということです．科学を深く学んだ人は「自分はその分野のプロフェッショナルで，正解を知っている」といった思い込みを持ちがちです．その状態で話すと上から目線になり，相手は「うっ…」となってしまい，自己開示のつもりが押し付けになって，ラポールが形成されずに本音の話ができなくなります．なので，「自分は専門分野で，そういう知識はあるけれど，それを押し付けるわけではありません．違う考え方もありますよ」といったやりとりになるよう意識して，ラポールを形成していくことを重視しました．

それと，社会学にはマージナルマン（marginal man）という言葉があります．境界線を行き来する人，人と人を繋ぐ役割を担う人を意味します．社会が変わるときに，異分野の交流が大事だといわれますけれど，そこにはマージナルマンと呼ばれるような人々が実は作用しています．「最初から自覚してマージナルマンを演じてみよう．大学でいろいろな研究をしたというスタンスもあるのだけれど，一方で地域の住民でもある．外と内との立場を，どちらにも属さず，中間領域の中で行き来してみよう」といった思いで，私はさまざまな場所でマージナルマンとしてふるまいました．一歩引いた形で押し付けず，客観的に「科学的には，こうやっていわれていますよ」，「住民目線ではそうですよね」といった形をとったのです．地域にいきなり入る前に，大学の時点でこういった考え方を勉強できていたことは大きかったと感じています．

先ほどの行政に対する批判の話に戻ります．実際に働いてみると，職員には善良で真面目で仕事のできる人が多い印象を持ちました．だけれど，行政は執行機関，決められたことを実現する機関です．そうである以上，意思決定を行う政治家，町でいうと町長や議員のほうを向かざるを得ません．住民から意見をもらっても，結局，それを決めるのは町長，議員，議会です．よい意思決定のもとで，よい執行体制が取れないと，職員はそれ以上のことは本来できません．それを越えてよい仕事をする職員はいっぱいいますけれど，批判されるのにはそういった背景があることに気づきました．構造的解決が必要なんです．なので，役場職員への批判は的外れだと思います．

「その態度はなんだ！」と表面的なことを批判するのは，その職員に帰属する問題ですけれど，構造的解決が必要な事柄に対して役場職員にいくらいってもダメです．政治家を変えないとダメです．ということで，「社会を変えたいなら政治家を変えよう」と思うようになりました．

それで，役場に勤めて４年で議会議員に立候補しようとしたのですけれど，そのときに町長に引き留めていただきまして，町長特命事項を扱う森林活用係というのを与えていただきました．森林を活用して何でもやるということだったので，森林が CO_2 を吸収固定する機能の経済化や森林療法に取り組みました．今，下川町は木質バイオマスで評価を得るようになりましたけれど，私は研究者の人と担当者をつないで，間接的に関わりました．

そんな中，平成の大合併の時代が到来しました．「さて，どうする？」と検討した結果，下川町は合併しないことになりました．ただ，財政は非常に厳しいものがありました．日本の将来の人口を考慮すると，合併の議論は再び起きる可能性があります．それを見越して，今のうちから民間主導の地域づくりを行っておけば，やがて行政が合併しても地域らしさは残るのではないかと考えました．下川町の周辺には，風連町があります．あそこはもち米が有名で，伊勢の赤福のもち米は風連町のものを使っています．風連町で作った一次産品のもち米が，向こうに行くと付加価値がついて高く売れるようになります．だったら，そのもち米を使った商品を開発しようということになり，大福を作りました．それが，大福バイキングで有名になって，風連町は道の駅だとかで大成功して，

地域らしさを残せるようになりました．結局，名寄と合併をしたのですけれど，今でも風連らしさはきちんと残っています．下川町も風連町のように，民間主導の地域づくりをもっとやっていかなければと思って，結局，私は役場を退職しました．そして，NPO 法人森の生活を設立しました．

3. 民間主導の地域づくり，そして下川町議会議員に

森の生活ではアロマテラピーで使うエッセンシャルオイルをつくる体験プログラムを用意しました．森の間伐をやって，枝葉を集めて，そこから水蒸気で蒸留してというような，森づくりから商品づくりまで全部を体験できるようになっています．あと，森林セルフケアという，森で健康づくりができるプログラムもあります．これは下川町で私が命名して進めたプログラムです．今はスケールアウトして全国組織の中で人材育成を含めてやっています．

冬場にスノーシューで森に入って，満月を見るプログラムもあります．ムーンウォークといいます．これもたいへん好評です．名前の由来は，マイケル・ジャクソンさんのムーンウォークですね．

結局，法人の事業はバトンタッチすることになりました．地域の課題として熱血のワンマン経営者の高齢化があります．ワンマンゆえに後継者が育っていないのです．「早くバトンタッチしても事業は回る」ことを見せたいという思いがあったので，事業継承を行いました．今，私は森から子育てに軸足を移しました．ボードゲームを作ったり，遊べたり，買えたりするお店を時間が取れるときだけ開いています．



図２　ムーンウォークの様子



図３　ボードゲームのお店「あそべや」

そして，3.11 の地震が起こります．それを契機に，議員に立候補しました．2015 年で２期目に入りました．１期目は思い切ったことがなかなかできなかったのですけれど，２期目は，もう一歩踏み込もうと思って，議会運営委員長に立候補しました．議員がかなり入れ替わって，新しい顔ぶれになっていたということもあり，議会活性化に向けたいろいろな取り組みを進めることができました．

地域でワールドカフェやオープンスペース・テクノロジーというと，アレルギー反応が出るので，「井戸ばた会議～町民と議員との対話～」といった具合に名前を変えて，翻訳して，最新の知見を試しています．議会のライブとか，録画配信だとか，政策サイクルを形成することにも挑戦しました．

最近，民主主義について振り返っていろいろ考えようとして，デモクラシーの

意味をあらためて調べてみたところ，主義・主張というより，民主的に物事を運営していくためのシステムであることを，Google 先生が教えてくれました．システムならサイエンスによる改善やイノベーションは可能なのではないかと思います．

現在，下川町は SDGs で注目されています．SDGs は国際的な目標です．困難な目標ですが，それを設定するために動く政治家や国連の人たちがいたからこそ，合意にこぎつけることができました．政治が機能すれば，そういうことが可能なのです．だから SDGs のように，さまざまな社会的課題を解決するときに，日本人は政治の前で一歩引いたりしてしまうのですけれど，政治は社会を動かしていくものですから，政治なしには社会は変わっていきません．なので，今日のテーマに寄せて「政治にサイエンスを」ということで，ぜひ，みなさんも一歩踏み込んでいただけたらと思います．